

海外研修視察報告書

平成 30 年 3 月 5 日

長崎県議会議長 様

長崎県議会議員 前田 哲也
同 川崎 祥司
同 里脇 清隆

海外研修視察を実施しましたので、つぎのとおり報告いたします。

1 日程 平成30年2月12日～2月15日

2 訪問国 フィリピン

3 調査目的

- ①フィリピンからの誘客（定期便運行に向けたチャーター便運行）
- ②県産品の輸出並びにフィリピンからの物流の可能性の構築
- ③教会群の世界遺産登録を機とした文化交流促進
- ④外国人就労特区認可に向けた人材供給ネットワークの確立

4 調査事項

- フィリピンはカトリック教徒が多いため、教会群の世界遺産登録を目指す本年は議会としてPRし誘客を働きを行う。
- 物流や人材供給ネットワークを構築するために、直接聞き取り等を行う。

5 調査結果

別添報告書のとおり

6 調査により得られた成果及び県政への反映方策

別添報告書のとおり

所得は大卒で最低一日1,000円から1,500円で、月20,000円前後、中間層で10万円～20万円だそうだが、富裕層と言われる高所得者が400万人いるそうだ。

首都マニラは人口密集地であるが、道路網の交通インフラの整備が進んでおらず、慢性的な交通渋滞で、わずか数キロメートルの移動も1時間かかるほどである。

特に朝は学校が始まる午前6時から7時の通勤・通学時間帯、役付き職員の通勤時間帯である9時台の2度交通渋滞があるそうで、現地の人は当たり前のように感じているようだ。

道路を走っている車は、ジープニーと呼ばれる乗合バスはかなり古いものもあるが、一般の乗用車は比較的新しい車が多く、高級車も少なからず見られる。

都市開発によって造られたマカティー地区はマニラ最大の市街地で大きなビルが立ち並び、スーパーをはじめとする商業地帯でその周りにオフィス群、さらにその周りに高級マンションなど居住地域が広がっており、ここに住む住民はかなりの富裕層である。

このマカティー地区は、その昔、農業地帯であったが蚊が大変多く、農業者が働けないほどの地域で、荒廃地となっていたところをフィリピンの財閥であるアヤラコーポレーションが開発したそうで、ちなみにマカティーとは「痒い」という語源だそうだ。

この地域に建てられたビルやホテルは50年間の借地契約が結ばれており、間もなく契約期間の50年を迎え、契約更新ができないビルも出ているそうで、解体更地にしなければならないという。

東南アジア訪問ということで、かなり暑いと覚悟して行ったが、今回の訪問がフィリピンで最も過ごしやすい時期だったこともあり、日本の初夏から雨季前の季節と同じぐらいの気候で、外を歩いても汗ばむこともなく過ごすことができた。

2. 視察先および、視察の目的

今回のフィリピン視察は、

第1にフィリピン航空訪問で、長崎空港へのチャーター便、定期便就航に向けての可能性を探るための要望活動。

第2に日本政府観光局（JNTO）マニラ事務所設置準備室を訪問し、長崎県への観光客の動向とさらなる観光客誘致に向けての要望活動。

第3に世界遺産の聖アグスティン教会を訪問し、観光施設でもある世界遺産の維持管理について。

第4にいすゞ自動車の現地法人を訪問し、現地採用の労働者であるフィリピン人の教育と労働に対する意識の持ち方を視察し、将来の長崎県への労働力としての可能性についての4つのテーマで首都マニラを中心に伺った。

特に昨年8月に中村知事が訪問したフィリピン航空本社への訪問は、より具体的な方針について話し合うことができ、大変有意義な視察であった。

今回の視察は観光振興対策がメインということで、長崎商工会議所観光消費拡大委員会委員長の島崎真英長崎自動車（株）代表取締役、長崎文化放送山本栄治営業戦略部長にも参加いただき、具体的戦略のお手伝いをいただくこととした。

3. フィリピン航空本社訪問

■中村知事からの親書渡し

フィリピン航空本社訪問では、生憎、社長がコースター授賞式で不在だったが、シーラ・トーマス企画担当部長をはじめ、販売セールス担当、海外担当などの役員4名が我々を迎えてくださった。

自己紹介の後、中村法道知事からフィリピン航空 ハイメ・パウティスタ社長宛の親書を手渡した。

親書は「昨年8月のフィリピン航空訪問のお礼と、フィリピン～長崎間のチャーター運航および、定期航路開設に向けて実務者レベルでの協議を進めているが、実現に向けてさらなるご高配を賜りたい」という内容である。

■進捗状況とフィリピン航空からの提案

今回の我々訪問団の大きな目的は、キリスト教関連遺産の世界遺産登録が今年7月に見込まれることから、そのタイミングでのチャーター便の運航の実現に向けての可能性の発掘と、将来の定期便就航に向けての要望であった。

まず、昨年8月の中村知事が訪問の折に要望した「チャーター便運航」についての検討について進捗状況を尋ねたところ、長崎～フィリピン間の計画としてはあるが、現実的には何も進んでいないとのことである。

現在、フィリピン航空の定期便は羽田、成田、関西（大阪）、中部（名古屋）、福岡の5空港、9路線に就航している。

特に2013年のビザ発給要件緩和に伴い、訪日客数が大幅に増加しているが、最近、観光客に人気の高いのは札幌、広島、沖縄だとのこと。

応対していただいたメンバーの一人が2年前に福岡から入り長崎のハウステンボスへ行ったとのこと、その時に感じたことで、長崎には英語が話せるツアーガイドがいなかった。

しかし、長崎については、福岡との交通アクセスも良く、長崎巡礼と福岡ショッピングなど絡めた計画はできそう、プロモーションは難しくないと思うのだがフィリピン国内における長崎の知名度不足を指摘され、まずは、

①フィリピンから日本への旅行者が急増している中で、「長崎」を売り込む努力が足りていない。

7月に開催される「旅行博」でのブース出展、ならびにインターネットでの観光セールスの実施。

②フィリピン航空観光部の担当者を長崎への招聘を依頼してはどうかなど、提案をいただいた。

■具体的な取り組みへ

我々訪問団はフィリピン航空側へ、チャーター便運航の実現に向けて、さらに具体的な提案を求めた結果、7月の潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録の時期に間に合うように、旅行プランの作成その他、長崎県として取り組む課題を明らかにすることができた。

①まずは、長崎を知っていただくために、福岡空港を利用した長崎への巡礼などの旅行プランの作成。

②長崎空港を利用したチャーター便運航による旅行プランの作成。

特に4泊～6泊のプランで、156席を埋められること。

長崎だけではなく、福岡のショッピングなども絡めたプラン作成。

フィリピン航空側からは、日本の観光業者、ホテル業界とともに、これらの計画をもって提案するならば、4月には会場を設定し、フィリピンの関係団体に対してプレゼンテーションを行える機会を作る。との確約をいただいた。

担当窓口は当日同席していた営業担当のライアン氏が行うとのこと。

■所 見

フィリピン航空訪問は単なる視察ではなく、昨年8月の中村知事の訪問を実現させるために要望活動として伺ったが、話をする中で、まず感じたことは「長崎」の認知度が低いということである。

フィリピンからの訪日観光客数が大幅に伸びている中、日本全国の観光地が売り込みを行っていることが判明した。

会話の中で、札幌、広島、沖縄の人气が高く、特に札幌という地名が多く出たが、観光地として注目を浴びているだけではなく、旅行業者を巻き込んだ営業活動が活発なのだろう。

岐阜県も観光プレゼンテーションを計画しているそうで、長崎県の取り組み方が一步も二歩も遅れていることを痛感した。

やはり県の担当者だけではなく、旅行業者をはじめ、観光業界を絡めた「官民連携」の活動が重要であり、具体的なプランを持つての売り込みを行う必要がある。

今回の訪問で、先述のとおり具体的な提案をいただくことができたが、これらは約束であり、我々もフィリピン航空側の提案に必ず応える責務がある。特に、潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録の期待が高まる中、この機会を逃さないよう必ず実現させなければならないと感じた。

4. 日本政府観光局（JNTO）マニラ事務所設置準備室訪問

■日本政府観光局の概要

日本政府観光局は海外の主要都市20カ所に事務所を構え、独立行政法人として外国人の訪日旅行を推進するための活動を行う政府機関である。

近年、急激な訪日観光客数の伸びを示しているフィリピンでは、昨年3月からマニラ事務所設置準備室を設け、法人登記等の手続きを進めている。

本年4月には法人登記の手続きが完了し、正式な事務所を構える予定。

現在は、登記完了を待ちながらも、仮事務所にて訪日観光客の誘致に向けての活動を展開している。

将来的な物流の可能性については、話題に挙げたが、まずは人流の道筋をつけて、また長崎県そのものがフィリピンにおいての認知度が低いので、今後の旅行博等の各種イベントでまずは本県をPRすることが先決という助言を頂いた。

フィリピンには日系企業の進出は1,440社で世界第8位だそうで、400万人と言われる富裕層がおり、アジアの国や地域への旅行者が420万人いる中で、訪日旅行者40万人は、まだまだ伸びしろが広く可能性を秘めていると思われる。

■訪日フィリピン人の推移

訪日フィリピン人の数は、2014年から急激に伸びはじめ180,000人と対前年比70%増で、その後も伸び続け、2017年は420,000人と、世界第9位、東南アジアで第3位の訪日客数となっている。

その要因は2013年のビザ発給の緩和により、以前は訪日の都度ビザの申請が必要だったが、2014年からは1回のビザ発給で何度でも訪日することができ、リピーターの訪日が増えたことがみられることと、同じく2013年締結されたオープンスカイ協定により、LCCの就航が可能になったことによるものと思われる。

渡航者の割合は団体に比べ、圧倒的に個人が多く、ウェブサイトでの申し込みが70%である。

訪日を選択する情報源として、訪日経験者や在日フィリピン人からの口コミが多い。

在日フィリピン人は38万人に上り、中国、韓国に次ぎ3番目に多い。訪問先は2017年の統計で、東京の244,000人、大阪が199,000人と圧倒的に多く、九州では1位が福岡の15,600人、長崎は2位だが5,020人ととどまっており、今後の戦略を考えていかなければならない。

■他県や旅行会社の動向

フィリピンでは5月のイースター休暇といわれる長期休暇の時期と、10月から12月にかけてのクリスマス休暇があり、この期間が訪日の需要シーズンである。

フィリピン人は10人から20人の大家族で生活している家庭が多く、特

に富裕層は家族一緒に旅行することが普通で、中にはメイドも一緒に旅行している。

さて、話を伺う中で、すでに多くの旅行会社や自治体がフィリピンをターゲットとした旅行商品やコンテンツを生み出して、長崎県としても早急な取り組みを行う必要があると感じた。

フィリピン航空での話の中に出た岐阜県がプレゼンテーションの計画を立てていることに加え、日本政府観光局で得た情報では、長野県がフィリピンの有名なタレントを招聘し、県が独自で観光PRを展開している。

また、旅行会社が2月7日から開催された旅行博で新しい商品として、沖縄空港へのチャーター便を運航させる旅行プランを売り出している。

日本本土への旅行費用が約2,000ドルに対し、沖縄プランは988ドルで、しかも2時間半で行けるという魅力を発信している。

■長崎県が取り組むべき戦略

敬虔なクリスチアンのフィリピン人は、聖地巡礼によく行かれるようで、長崎県もストーリー性を持たせるプランを組み立てることで可能性も膨らむのではないかと。

アイデアとしてはフィリピン航空の考えと同じく、旅行会社を回るだけでなく、具体的なプランを創出することが重要である。

- ①潜伏キリシタン関連遺産のストーリー性を活かしたプラン
- ②他の地域を線で結ぶパッケージプランの組み立て
- ③情報発信のコンテンツの創出とプレゼンテーションの実施等である。

■所見

「訪日フィリピン人市場の概況」を見ると、訪日観光客の伸びと傾向が分かるが、初めての訪日客が求めるものとして、①食、②ショッピング、③景勝地観光、④街歩き、⑤テーマパークである。

また売り出されているプランの旅行日程としては4泊5日、5泊6日が主流であり、長崎県としては長崎空港を活用する場合、フィリピン航空で伺った意見と同様に、長崎だけではなく、他都市を結んだプランの設定を考える必要があると思われる。

今後は県当局だけでは無理があると思われることから、長崎の魅力をしっかりとプロデュースできる機関との協力と、旅行会社や観光関係機関との連携を密にする必要があると感じた。

先述したように、潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録が目前に迫っていることを考えると、早急な取り組みを求めるものである。

5. いすゞフィリピン工場

■いすゞフィリピン現地工場の概要

ホテルから南西へ約40km、高速道路を使って約1時間のラグナ州ピニアン町にある工業団地の中に敷地面積131,622㎡(約40,000坪)の「いすゞフィリピン現地工場」がある。

いすゞ自動車と三菱商事が各35%、フィリピンの財閥アヤラコーポレーション、ユーチェンコグループが各15%出資の資本金10億ペソ、日本円で約22億円で1995年8月会社登記、1996年6月に生産開始で、年間16,000台の生産能力を持ち、2017年は13,289台を生産。

従業員は646名で、管理、技術職の13名の日本人を除くほとんどが現地のフィリピン人である。

いすゞの自動車の得意分野であるトラックを主としてSUVなどの乗用車も製造しており、フィリピンでのトラックシェアは52.6%で、18年連続でシェア1位を獲得している。

工場働くフィリピン人の賃金は日本円で月平均35,000円だそうだ。

工場内の見学をさせていただいたが、テレビ等で見る日本の工場のようなロボットでの溶接などは見受けられないが、部品等が整然と並ぶ工場内ではフィリピン人が作業に励み、我々に対しても気持ちよく挨拶してくださった。

ロボット化の導入されている日本国内の工場は、タクト方式で2分に1台が完成されて出てくるが、フィリピン工場では人力作業で行うため、20分に1台のペースである。

ロボット化を導入しない理由は、そこまで需要がないということと、現地の労働力事情もあるからとのことだが、生産性を上げる為、今後、製造ラインの設備投資も検討するとのこと。

■フィリピンの車事情

フィリピン人の車保有は、人口1,000人あたり33台で全体には年間47万台の需要がある。

乗用車の価格は日本で販売されている同程度のものとさほど変わらず、国民の平均収入からみて、車はかなり高価なものと感じたが、

トラック全需はかつては90%が中古車だったが、近年は新車需要が急増し、2016年には、25%が新車トラックとなり、アセアン主要5か国の中でも需要が右肩上がり伸びており、経済成長率7%という状況をうなずかせるものである。

フィリピンでは車検制度はないが、毎年、車の登録が必要で、政府が15年を超える車は登録できない新たな方針(トラック15年規制)を打ち出し、まずトラックなどの大型車両の登録ができなくなっている。

2018年1月からユーロ4排ガス規制をアセアン内で最初に導入し、また、4.5トンを上回るトラックの市内乗り入れ規制を実施している。

これらの状況からみても、さらに需要が伸びていくものと思われ、いすゞ自動車にとっては追い風といえる。

■フィリピン人労働者のスキル

今回の工場視察の目的は、全人口の10%、労働人口で見ると20%にあたる約1,000万人が、海外労働者というフィリピン人のスキルと日本の労働力不足の補填としての可能性を探るべく伺った。

いすゞフィリピンの社長によると、フィリピン人は勤勉で、アセアンの中ではスキルは高い方だとの評価で、英語が堪能であることから、指導もしやすく、マニュアル通りに教えたことはちゃんと守れるとのこと。

日本へ行きたい労働者が多いそうで、日本工場にも常時10名を派遣している。

勤勉さは製造業に向いているが、今年から優秀な人材についてはメカニックとしても研修を始めたそうで、1年間の研修を行って、ディーラーへの派遣を行う予定とのこと。

■所 見

長崎県では国に対し、農業分野での外国人の就労を認める国家戦略特区を要望しているが、福祉・介護の分野をはじめ、就労者不足も問題となっており、将来の外国人労働者の確保という課題に向けて、フィリピン人も視野に入れて考えることができるのではないか。

6. 聖アグスティン教会（世界遺産）

■聖アグスティン教会の歴史

フィリピンには、ルソンエリアに三つ、ビザヤエリアに一つの計四つの世界遺産に登録されているカトリック教会がある。

今回の視察は、フィリピンで最初にできた聖アグスティン教会を訪問先に選び、実際に使われている世界遺産の観光資源としての活用と建物および展示品等の維持管理について伺った。

マニラ市街地に石畳で西洋風の建物が建ち並ぶゼネラル・ルナ・ストリート横に石造りの荘厳な聖アグスティン教会がある。

スペインの統治下に置かれていた1581年、フィリピンで最初の教会として建てられた。

当初の建築材料は竹や木材を用いて建てられたが、火災等で二度崩壊し、現在の建物は三回目の建築で、1586年着工し1607年完成。

500年に一度の大地震にも耐えられるよう大きな柱で支えられ、幸い先の大戦でも残った建物で、フィリピン製の素材と外国製の素材を使用し、高い湿度に耐えられるよう、サンゴと石灰に卵の白身を用いており、築後400年以上経つが、ほとんど傷んでいない。

当時の最高の技術で建てられた技法で、この教会の建築技術で他の教会も建てられるようになった見本的な建物である。

教会に隣接して旧アグスティン修道会の建物があるが、現在は博物館として資料等の展示がなされている。

教会を正面から見ると、左右にあったであろうと思われる鐘の棟が左側にはない。1880年のマニラ大地震で亀裂が入り、取り除かれたとのこと。鐘は博物館に展示されているが、世界遺産に指定されたため、鐘の棟を新たに増築することができない。

観光関係での入場料は200ペソ（日本円で約500円）で、現地の方は少し安くしている。

聖堂内に入ると、歴史をうかがわせる什器や備品、像が置かれている。天井一面の装飾は、彫刻のように見えるが、だまし絵の技法によって描かれたもので見事なものだ。

広い聖堂には当然マイク設備はなかったので、祭壇から降りたところの柱には一段高い説教台が設けてあるのは、日本では見ることのない設備である。

300年前に作られたマリア像は当初、金や銀の装飾がなされ、また、幼少のキリスト像を抱いていたらしいが、長い年月の中で盗難にあったそうで、残念なことである。

フィリピン人にとって、この教会で結婚式を挙げることは憧れで、多い時には一日に10組も式を挙げることもあるそうだが、ただ、この教会で結婚式を挙げられる人は、基本的に両方がフィリピン人であること。

観光客は多い時でバス7台から10台ほど来る時があり、一度に入らないように制限をすることもある。

■世界遺産としての教会の維持管理

長い歴史と貴重な建物や資料の維持管理や補修は教会にとっても大変な問題で、不法侵入や盗難防止、また、いたずら防止等のセキュリティ対策としては防犯カメラを設置している。

維持管理に要する資金については、200ペソの入場料では電気代にも足らず、また、施設や展示品の補修等に対する支援を何度申請しても、世界遺産の登録はなされているが、国の文化財の指定を受けてないためか分からないが、一度も支援を受けられない。

主な資金は教会がいくつもの学校を経営しており、そこから資金を調達している状況である。

スペイン大使館の理解で、外壁の補修費用など、たまに出していただくこともあるらしいが、大変苦勞しているというのが現状だと感じた。

■所 見

この教会は、古い歴史とバロックとフィリピンネイティブ式のコンビネーションによるユニークな建築方式で、建物自体の価値と残された展示品の価値が評価されて世界遺産に指定されたそうだが、世界遺産の指定を受ける前から教会として、維持管理を大切に取り組んでこられてきたことがわかる。

世界遺産の指定を受けたことで、観光客の訪問が増えたことで、むしろ苦勞されているのかもしれないと感じた。

施設そのものを見せる聖アグスティン教会とストーリー性を重視した長崎の潜伏キリシタン関連遺産との違いはあるものの、維持管理における予算の確保は重要な課題である。

特に頑丈な造りの聖アグスティン教会に比べ、木造の部分が多い長崎の教会は、さらに慎重な維持管理を行わなければ、今後、多くの観光客の訪れによって、傷みや、備品等の管理状況も心配される。

本年夏の世界遺産登録が期待される今日、県のしっかりとした方針と取り組みを求めるものである。

2月12日 夕方 フィリピン マニラ到着
ホテルの部屋から見渡す風景



2月13日午前 フィリピン航空本社訪問



中村法道知事の親書を渡す



2月13日 午後 日本政府観光局(JNTO)



2月14日 午前 いすゞフィリピン



2月14日 午後 聖アグスティン教会



博物館 資料展示



聖堂内



インド・バンガロール視察報告書

平成 30 年 3 月 9 日

長崎県議会議長
八江 利春 様

長崎県議会議員
山本 啓介

インド・バンガロールを視察いたしましたので、次の通り報告いたします。

1. 日程 平成 30 年 2 月 10 日～平成 30 年 2 月 17 日
2. 訪問国 インド(バンガロール)
3. 調査目的
IT 産業人材・インバウンド対策・雇用対策・人材交流
4. 調査事項
インバウンドの可能性・日本語教育の現場・料理関連大学視察・観光関係大学視察・IT 企業との意見交換
5. 調査結果
(別紙により作成)
6. 調査によって得られた成果及び県政への反映方策
 - IT 企業との意見交換で得られた日本に対する認識や、進出意欲について県庁担当者へ伝え、関係者を招いてのミーティングを提案したい。
 - インドの観光関係者から連携申し入れを受けたので執行部への提案及び国内旅行会社とのマッチングや接点を探す作業を展開する。
 - インドにおいて料理について学ぶ大学と「日本料理」についての新たな取り組みの提案があったので県内調理師・飲食店経営関係者に県内における展開について提案する。
 - ヨガに関する人脈との関係ができ、観光やアクティビティ及びホテル内スパなどの新たなサービスについての展開を提案されたので観光関係者などにつないでいく。
 - Bollywood 映画制作関係者から県内における撮影などの申し入れを受けているので受け入れ態勢の構築などの可能性を検討していく。

インド・バンガロール視察

自由民主党 山本 啓介

2018年2月10日～2018年2月16日

①観光関係者との意見交換

時間:2018/02/12/13:00

場所:HOTEL LE ruchi THE PRINCE,

ホテル・ラッチー・ザ・プリンス

Hunsur Road, 986/625, 12th Main Road,

Vijayanagar 4th Stage, Hinkal, Mysuru, Karnataka 570017

対応者

[ruchi]

[Itravel] SudiptaDeb

[SilverPeak Global]Subha Narsingh Bhattachan・Vinay Nanjappa・Isaku Mori・Tej Kumar

調査事項:インハウンドの可能性について

調査内容:ホテル経営者と日本への送客を企画準備する企業との意見交換を通じて、インド人の旅行や観光に対する意識などを確認する。

調査成果:インドにおける観光は食と信仰心と自然体験とホテル滞在での楽しみなどが優先される。ホテル内にはマッサージやプールなどのスパ機能があり、食事はその土地ならではの味付けや料理が用意される。その土地ならではのものを楽しむ人々の中には宗教の祭りが動機となることもある。

インドからの送客では日本ならではのものはもちろんだが、インド人が求めるホテル滞在での楽しみなどの環境整備が必要ではないかとの意見があった。

ハイクラス層の教育旅行においては、目的先が高額な設定の海外であっても問題はないとの認識が聞かれた。Itravel 社代表 SudiptaDeb 氏より日本国内への送客について、京都・大阪と長崎・壱岐などの組み合わせなどの話が提案された。動画サイトから「壱岐の島の体験学習」の英語版動画を視聴してもらった際大変興味を示したことから、多くの文化や種族が同在するインドにおいては国というよりも地域に伝わる伝統や風習・料理に興味を持つ傾向が確認された。

ポイント:「地域の伝統や歴史風習や慣習・料理を体験することに興味を持つが、語学や風習といった自身の部分に対するケアが整った環境であることが旅行の前提である。言い換えればそういった環境が整った場所であればどこでも行く、そうだ。」



Hunsur Road, 986/625, 12th Main Road, Vijayanagar 4th Stage, Hinkal, Mysuru, Karnataka 570017
[ruchi]

[Itravel] SudiptaDeb

[SilverPeak Global] Subha Narsingh Bhattachan • Vinay Nanjappa • Isaku Mori • Tej Kumar



②観光関係者との意見交換・ネイチャーツーリズム

時間:2018/02/12/17:00~2018/02/13

場所:The Serai Bandipur

ザ・セライ・バンディプール

Kaniyanpura Village, Mangala Post, Gundlupet Taluk, Mysore, Karnataka 571126

対応者[Itravel] SudiptaDeb

[SilverPeak Global]Subha Narsingh Bhattachan・Vinay Nanjappa・Isaku Mori・Tej Kumar

調査事項:インバウンドの可能性・ネイチャーガイド

調査内容:①日本への送客を企画準備中の旅行会社との意見交換を通じて、インド人の旅行や観光に対する意識などを確認する。②ネイチャーガイドや国立公園内でのリゾート展開と自然保護の取り組みについて。

調査成果:①ランチに引き続き、Itravel 社代表 SudiptaDeb 氏と今後の展開について意見交換を行う。持参した英語版の壱岐市のパンフレットや動画などを確認しながらインド人の好みについて話を聞く。パンフレットやネットにおける情報発信については、インド人が好むテイストで作成しなければ目に留まらず耳に残らないという意見が聞けた。インドは 200km を過ぎると異なることば、文化と言われる。800 を越える種族。「28 の州と 7 つの政府直轄地区。30 を越える異なる国々が同じインドというパスポートを持っているようなものだ」と説明してくれた。結局、インド人が好む情報発信の色はインド人にし出せないとの意見で一致した。②ネイチャーガイドはシンプルに手に動物・植物図鑑をもって首から双眼鏡を下げて行われた。ガイドは素早く鳥を発見し、指で方向を指しながら小声で名前を言う。そして図鑑のページを指して私に見せる。植物や動物のフン、虫などゆっくりとその作業をしながら園内を程よく歩いて終わり。何かとても心地よく、ガイドの態度がシンプルでソフトだったのが良かったと感じた。こういう空間ではさほどの個性は必要ないのかもしれない。主役は動植物でありゲストなのだ。その後、バンディプール国立公園が取り組んでいるインドタイガーの保護についての動画を視聴した。すぐそこに現実がある空間での映像は説得力があり、虎が部屋にいるわけではないが印象に残るものとなった。早朝からのネイチャーガイドは車に乗ってのものだった。国立公園内の重要な中心部分は道路すら舗装がされていない。振り返ればそのような中にホテルがあるのだから贅沢な空間が人々を引き付けるというのは理解できる話だ。きっと自然を守るために国立公園内を上手に開発して、その収益によってさらに保護と地域外からのゲストの理解を進めるのだ。壱岐対馬国定公園のことを考えた。県が管理する国定公園を守りながら積極的にリゾートへの流れをつくることのできるのならば保護にも力が湧くのではないか。



The Serai Bandipur

ザ・セライ・バンディプール

Kaniyanpura Village, Mangala Post, Gundlupet Taluk, Mysore, Karnataka 571126



Bandipur National Park

Marigudi Road, Hangala Village,

Gundlupet Taluk, ChamaraJanagar District, Bandipur, Karnataka 571126

③人材交流・IT 産業人材についての意見交換

時間:2018/02/14/10:00

場所:SilverPeak Global Pvt. Ltd.

シルバーピークグローバル

41, 8th E Main Rd, 4th T Block East, 4th Block, Jayanagar, Bengaluru, Karnataka 560082

対応者 大学学長・理事長など

[DON BOSCO]B.Manjunath (vice president) Dr.RajuBPG (director administration)

Dr.ArunMudhol (Director)

[SilverPeak Global]Subha Narsingh Bhattachan・Vinay Nanjappa・Isaku Mori・Sithara Raj

調査事項:IT 産業人材・MBA 取得について日本での課程設置について

調査内容:IT 産業人材など優秀な人材を社会に輩出しているドン・ボスコ大学の学長ら意見交換。

調査成果:日本における人材交流や学位取得の課程において日本での単位取得などについて意見を交わすことができた。長崎県や壱岐市に対して、インバウンドを推進し、優秀な人材を誘致すること、大学としての取り組みを展開することなどについて、我々の取り組みに対して理解を得られた。

インドでは教育に力入れられており、IT 産業に限らず大学での学びは仕事への学びの印象が強く、一定レベルの学生が社会に進出しているとの説明だった。しかしながら人口増であり就職先は其中でも優秀な人材から良い会社に入るため、国外に活躍の場を求める傾向にあり、その展開を国も支援しているとのことだった。



④日本語教育の現場視察

時間:2018/02/14/10:30

場所:SilverPeak Global Pvt. Ltd.

シルバーピークグローバル

41, 8th E Main Rd, 4th T Block East, 4th Block,

Jayanagar, Bengaluru, Karnataka 560082

調査事項:日本語教育の現場

調査内容:実際に日本語の授業を行っている教室にて視察し、生徒らと交流する。

調査成果:大学卒業後の年代が多いクラスの中は非常に積極的に「日本語を発音」する雰囲気。しかしながら少々はにかみながらチャレンジする様子うかがえたことはインド人の国民性なのかもしれない。奥ゆかしく利発。わずか数か月とのことだったが自己紹介や自身の夢などをきれいな日本語を上手に話していた。杵岐市に来ているインド人がバイトで方言がわからず困っていると聞いたが、当然だと思う。私からは「島国の島の島から来た」「神が作った島国」などと話していくとその都度知っている単語に反応していた。ほとんどの生徒が「日本に行くこと」をモチベーションとしており、日本での仕事を念頭にその必要スキルとしての「日本語」をマスターしようと必死なのだそう。男子よりも女子のほうが丁寧に多くの単語を口にしていた。



⑤料理・観光関係大学との意見交換

時間:2018/02/14/11:30

場所:Institute of Hotel Management I.I.H.M 短期大学

S.J. Polytechnic Campus, Near M S Building, Seshadri Road, Ambedkar Veedhi, Bengaluru, Karnataka 560001

対応者:学長

[I.I.H.M]ShaliniKhannaCharles (Director)

[SilverPeak Global]Subha Narsingh Bhattachan・Vinay Nanjappa・Isaku Mori・Tej Kumar

調査事項:料理・観光関係大学

調査内容:料理と観光について学ぶ短期大学の代表から大学の説明を受け、日本とのかかわりや接点について意見交換する。

調査結果:学生は卒業後の就職に間違わないように真剣に取り組んでいる。大学も入るグループは世界的な若者による料理の大会「YOUNG CHEF OLYMPIAD」を開催しており、日本の参加がないことを残念がっていた。日本からの参加を強く求められた。代表は日本料理に大変強い関心を持っており、同時に世界には和食と呼ばれるジャンルはよく出会うがそれは本物とは呼べないレベルばかりだとのこと。大学の学びの一つに日本での研修を入れることを検討すると発言した。この大学では、すぐそこにある社会に向けたトレーニングがメインであり、得られたものは社会で通用する技術である。



⑥料理・観光関係大学との意見交換

時間:2018/02/14/12:00

場所:Garden City University ガーデンシティ大学

16th KM, Old Madras Road, Battarahalli, Bengaluru, Karnataka 560049

対応者:学長・理事長・学部長 Dr.D.P.Sudhagar (Associate Professor)

[SilverPeak Global]Subha Narsingh Bhattachan・Vinay Nanjappa・Isaku Mori・Tej Kumar

調査事項:料理・観光・ITなどを学ぶ大学との意見交換

調査内容:料理・観光・ITについて学ぶ4年制大学の代表から大学の説明を受け、日本とのかかわりや接点について意見交換する。

調査成果:ここでの学位取得者は国の資格として料理人としてのライセンスを得ることとなる。そのことは同時に仕事場所を得ることになるが、それはすべての学生に与えられるものではない。

ここにおいても日本料理への興味は感じられた。教授である学部長からは日本料理を学ぶ環境について積極的な提案がなされた。日本の料理人が一人前になるには、技術について段階を経る必要があり、経験を必要とするので大変な時間がかかる「日本料理は時間が人を育てる」という印象を私が持たせてしまったために、「僅かな時間日本での課程だけでそれは得られるのか?」という問いを引き出してしまった。長崎・壱岐市における課程の期間を設けるという狙いが少し説明困難になったかと思われたが、シルバーピーク代表の Subha Narsingh Bhattachan 氏の「確かに長い年月を要するのだが、それを日本の伝統や慣習風土が多く残り、日本の良い食材がそろそろ壱岐の島で学ぶのであればその時間は学生たちにとって大変色濃く残る」といった趣旨の発言によって教授の理解は良い方へと深まったと感じた。





⑦料理を学ぶ大学との意見交換

時間:2018/02/14/13:00

場所:Christ University クライスト大学

Hosur Road, Bhavani Nagar, Bhavani Nagar, Suddagunte Palya, Bengaluru, Karnataka 560029

対応者:学長・理事長・学部長料理担当教授

Dr.JainMathew (Professor)

KerwinSavioNigli (Associate Professor)

[SilverPeak Global]Subha Narsingh Bhattachan・Vinay Nanjappa・Isaku Mori・Tej Kumar

調査事項:料理大学との意見交換

調査内容:料理について学ぶ4年制大学の代表から大学の説明を受け、日本とのかかわりや接点について意見交換する。また、スライドを使って壱岐の島の紹介を行う。

調査成果:学生と教員、関係者を合わせて2万人が通うキャンパスは人の多さが目立った。多くの国籍がいるであろうことは少し学内を歩くだけで理解できた。様々な学部があるのだが目的として今回は「料理」についてのみに絞って意見交換を行った。冒頭に説明を受けたのち、「日本料理に興味があるのならば、こちらの大学の料理の課程の時間を日本の島で学生たちに提供できないか」とこちらから提案し、シルバーピークが用意してくれた壱岐の島の動画などを視聴してもらった。「だし」という言葉に料理担当の教授がかなり食いついていた。現時点で学内に日本料理を教えるスキルはないので大変興味があるが、安くはないであろう経済的な投資を行って得られるものがあるのか、それだけの環境が用意できるのかなどの質問が出てきた。それらのほとんどが「そうであるのなら検討に値する」といった感じてあったが、他の大学よりも少し反応は弱い様感じた。しかし、興味の範囲は他よりも格段に広く深いものがあった。それは、私はあまり答えることはできなかったが質問の内容が「だし」の構成や「器」について、または季節など多岐にわたっていたからだ。改めて料理としての「日本料理」とスキルとしての「日本料理」双方ともに需要はあると感じた。





⑧IT 企業との意見交換

時間:2018/02/14/15:00

場所:

参加企業

Fomax Information Technologies Pvt Ltd - www.fomaxtech.com

Enventure - www.enventure.com

Sysfore Technologies - www.sysfore.com

Blute Labs - www.blutelabs.com

Octal Frames Technologies - www.octalframes.com

InfoSree Technologies Private Limited - www.infosree.com

RAPIDD Technologies - www.rapidd.net

exponent dynamix - www.exponentdx.com

Mindlogicx - www.mindlogicx.com

Virtulive Technologies - www.virtulive.com



調査事項:IT 中小企業との意見交換

調査内容:意見交換を通じて互いの課題や将来的な可能性などについて接点を探す。

調査成果:シルバーピーク社が集めてくれた中小企業 15 社とのミーティングに私が持ち込んだ課題は、「日本は人口減少によって小さなコミュニティは、経済、共助、国防などの機能低下を進んでいる」ということ。そして、彼らが説明する課題は「中小企業は様々なアイデアを商品化しようとするがそれはアイデアベースで大きな会社買い取られる。そのような状況でもなんとか日本方面に営業をしたいと思っている。できれば日本にオフィスを構えたいが経済的に厳しいものがある。」といったものだった。そこで私の補足説明は「日本はいま人口減少対策を各県や各市がいわば競争している。その時に地方に企業を誘致、起業する、移り住むことに公的な支援がある。さらに、私が暮らす壱岐の島は国境離島であり更なる公的な支援が用意されている。」というもの。人口が 14 億人ともいわれるインドに暮らす彼らに人口減少問題が理解できるか不安だったが、インドにおいても中国など他国と接する地域では、国土を守るために「タックスフリー」などを国境政策として展開しているらしく、国境離島は理解されたようだ。そこで「当然日本人は足りないわけだから海外に目は向くのは自然であり、その目線が近いか遠いかという差だけだ」と話した。私の説明は「うちの自治体と組まないか？」とストレートに伝わったらしい。その証拠に社「そんな面倒なご紹介よりもどこかパートナーとなる企業を紹介してくれ」と発言する人が出た。そこでシルバーピーク社の Subha 氏は「それで上手くいくのならあなたはここにいないだろう？」と言い放った。そして、続けて「おそらく皆さんは日本へのアプローチを間違ってきたのだろう。ここにいる山本氏をインドに連れてくるのに 2 年間かかった。彼は私たちと将来的なビジョンや夢は共有するものの次に出てくる言葉は、これまではどうだったか、他ではどうだったか、根拠や実績を紙でくれというものだ。日本人は税金の使い道をとにかく市民に説明しなくてはいけないのだ。」ここで笑いが起きているのだからここにいるインド人はみんな Subha 氏の評する日本人像に同感なのだろう。彼らはこの 2 年間本当に「紙」を出してこなかった。出てきても英語の大雑把なものばかりだ。口頭による説明と大きなジェスチャーで同意を求めてくる。アイデアやビジョンは確かに私とよく合うところがあって盛り上がるのだが、政治に携わる私はやはり「根拠を示してくれ、これまではどうだったのか」と問いかけた。彼らの中ではそういった費用対効果や市民の説明の材料を集めることはさほど重要ではないらしく、互いに未来のビジョンが共有出来たら「チャレンジ」だそうだ。

通訳をしてくれた森氏は意識に努めたがおそらく「だから日本人は判断決断が遅いのだ」的な話で盛り上がっていたのだろう。しかし、こういった部分がすり合わせできるのならばインド人ほど優秀であり日本へ意識が向かっている人材はいないと感じた。そして、はじかれた 1 名を除いて 14 名は「どうすれば日本に行けるか」という事を真剣に考え始めたようだ。「シェアオフィス」「スタートアップオフィス」などいろんなアイデアが出てきた。国や県市の支援事業についても具体的な質問が出てきた。最終的には例えば壱岐市に「シェアオフィス」ができたとしてみんながそこを拠点に日本に営業をする。その傍らで壱岐市の福祉や医療、産業や観光などについてアイデアを根付かせる。またはインバウンド対策の情報発信サイトや、多言語案内などについてもアイデアが生まれるかもしれない。そんな話をしながら私は日本に帰るが、この後もこの会は検討を続けるという事でまとめ、大幅に時間が過ぎてミーティングは終了した。会終了後それぞれの企業が自身の会社説明やアイデアの説明でそれからさ

らにその場で時間を費やすこととなったが、その風景は何か新しい可能性を感じる事ができた。



⑨IT 企業との意見交換

時間:2018/02/15/11:00

場所:Microsoft Research マイクロソフト リサーチ

“Vigyan”, #9, Lavelle Road, Shanthala Nagar, Ashok Nagar, Bengaluru, Karnataka 560001

対応者:

[Microsoft]Amaresh Ramaswamy (Senior Director)

[SilverPeak Global]Subha Narsingh Bhattachan・Vinay Nanjappa・Isaku Mori・Tej Kumar

調査事項:IT 企業との意見交換

調査内容:IT 企業との意見交換を通じて接点を探る。

調査成果:昨日の中小企業との意見交換を踏まえて大手の話も聞こうと訪問することにした。ID カードを作成入館するとまず食堂がある廊下を進んだ。まだ昼前であったが多くの社員が食堂で食事したり、お茶を飲んだり会話したりリラックスしている。時間的な制限はなく、彼らは「自らの仕事をするだけ」だそうだ。誰一人スーツを着ておらず、ジーンズとポロシャツぐらいの格好だ。スーツの我々はそんな雰囲気の中、廊下の突き当りにあるコーヒーカウンターで高い位置からミルクを注いだコーヒーが入ったマグカップをもってエレベーターに乗り、ミーティングルームへ向かった。

シニアディレクターの肩書の Amaresh Ramaswamy 氏はにこやかに我々を歓迎してくれた。

SilverPeak Global の代表 Subha Narsingh Bhattachan 氏は昨日のミーティング内容を説明し、「我々は大きな会社には大きな心があると認識している。その上で言葉を交わすことによって何か我々の間に接点を見つけることができればと思いやってきた」といった趣旨のことを付け加えた。

Amaresh Ramaswamy 氏から Microsoftresearch が何を仕事としているのか説明があった。

マイクロソフトの研究機関であるマイクロソフトリサーチは主な研究分野として4つのテーマを掲げている。「インテリジェンス」(AI など)「システム」(データ分析やセキュリティなど)「セオリー」(数学やアルゴリズム)「その他」(新しい何か)。なるほど研究所なのだ、としっかりと理解することができた。

その後、私の方から世界的企業の重要な研究所のシニアディレクターに対して「長崎県と壱岐の課題」について話した。「長崎県は世界遺産に登録されるほどの歴史ある工業の港を有している。それらの主体である造船業はいま下り坂と言わざるを得ない状況となっている。歴史と経済を支える産業は今や自治体を支える柱ではなくなろうとしているのだ。そのような中、自治体のトップは新たな自らの任期のスタートに、これらの産業に比肩する基幹産業として IT 産業を打ち出した。これは長い歴史を持つ日本を代表する造船業の地・長崎の転換でありチャレンジであると理解している。私の周りには優秀な経営者やまじめで働き者の従業員はよく見るが、アイデアを商品化したり、起業などに積極的に取り組む人材はあまり見られない。インドの人材や企業の影響を何らかの形で私の長崎県に及ぼすことを願う。あわせて、壱岐の島において人口減少という課題を乗り越える方策として、島に機能の中小企業とオフィスを構えようというアイデアを持っている。」などと話した。Amaresh Ramaswamy 氏は静かに耳を傾けながら通訳された話に幾度か頷き、理解を示した。その後、Subha Narsingh Bhattachan 氏を交えながら「接点」を探る会話が続けられた。時間が60分に近づこうとした時「具体的な提案」としてこちらから人材交流に触れたとき、Amaresh Ramaswamy 氏は少し雰囲気を変えては

「日本は人材をとよく言うが、あなた方が臨んでいる人材はジャパナイズされた人材を指しているの
だろう」との発言があった。わかりやすくそして、これから私がすべきことが分かったような気がした。「私は
それが無ければいいのか？その言葉が聞けて良かった」と伝えた。

この建物に入れば彼のいうことも十分わかる。それは風習や社会通念や組織のルールだけではない。
「欧米ではチャレンジを応援する。経験者とそのチャレンジに投資をする。失敗してもチャレンジするも
のに再び投資をする。組織を離れチャレンジするものが失敗したら、組織に戻してやる。」関係者から
そんな話を聞いた。バンガロールで聞けた話は私にとって次の一步を間違わない情報となりそうだ。

